

# 西国ドライブ巡拝記

## 西国札所(第二十四番～第二十七番)

(pdf Version)

平成 12 年 1 月 26 日  
平成 15 年 2 月 2 日 (pdf 化)  
阿部敏雄 (敏翁)

この旅行記は、平成 9 年(1997)11月13日と14日に、西国三十三観音霊場第二十四番から二十七番までとその地域の名刹などをドライブ巡礼した時のもので、パソコン通信 PC-VAN の SIG 「NTRAVEL」に掲載した文章を主体にしたものに画像を加えて纏めたものです

### 目次(見たいところをクリックすればそこにジャンプします)

I. はじめに .....	1
II. 旅行概要 .....	2
2. 1 旅行概略図.....	2
2. 2 旅行ルート .....	2
2. 3 持参した主な書籍など .....	2
2. 4 旅の経緯.....	2
III. 円教寺(第二十七番).....	3
IV. 北条の石仏から加古川市まで .....	4
4. 1 北条の石仏群.....	4
4. 2 古法華寺.....	5
4. 3 一乗寺(第二十六番).....	5
V. 鶴林寺、浄土寺、朝光寺 .....	7
5. 1 鶴林寺 .....	7
5. 2 浄土寺・阿弥陀三尊(国宝) .....	8
5. 3 朝光寺 .....	9
VI. 清水寺(第二十五番)、花山院(番外).....	10
VII. 中山寺(第二十四番).....	11
VIII. 清荒神 (キヨスクヅン) .....	12
8. 1 鉄斎美術館 .....	13
IX. 旅の終わり .....	15

## 西国ドライブ巡拝記 (その 3) 第一報 敏翁

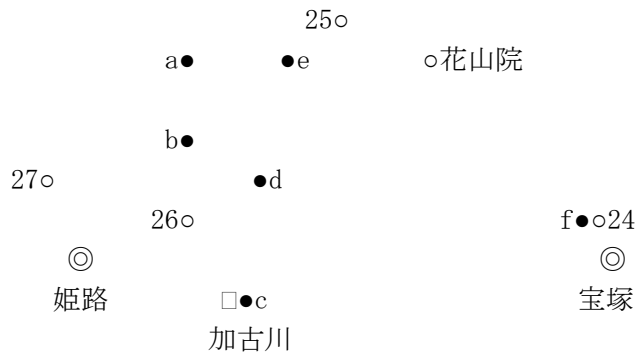
### I. はじめに

今回は、西国 33 観音の第 24 番から第 27 番札所までを逆に回りました。

調べていくとその地域には、33 観音札所の他にも名刹が多い事が解り、それらの寺々も併せて回ることにしました。

## Ⅱ. 旅行概要

### 2. 1 旅行概略図



- : 都市    o: 33 観音札所    27: 第27番円教寺    26: 第26番一乗寺  
25: 第25番清水寺    24: 第24番中山寺
- : その他の寺社    a: 北条の石仏    b: 古法華寺    c: 鶴林寺  
d: 浄土寺    e: 朝光寺    f: 清荒神

### 2. 2 旅行ルート

【11月13日】姫路でレンタカー（日産パルサー1500cc）を借りる。

→第27番円教寺→北条の石仏→古法華寺→第26番一乗寺→加古川市　ここで泊。

【11月14日】→鶴林寺→浄土寺→朝光寺→第25番清水寺→番外　花山院→第24番中山寺→清荒神→新大阪==（新幹線）==>新横浜

### 2. 3 持参した主な書籍など

1. 西国札所会・編「西国33観音巡礼」朱鷺書房
2. 杉本苑子「西国巡拝記」昭和41年　大法輪閣
3. 栗田勇「古寺巡礼・日本精神の風景」1990年　春秋社
4. 10万分の一・地図

上記2及び3は、図書館で借りたもの。

2の杉本さんの本は、（その1）から毎度お世話になっているもの。

3の栗田さんの本の中に、「播磨・国宝のかくれ里」という章があり、これが、27、26番札所の他、上記略図のbからeの良い案内書となった。

### 2. 4 旅の経緯

今回も、徳山で仕事があり、12日夜は、徳山に泊まり、13日朝新幹線で姫路に向かった。

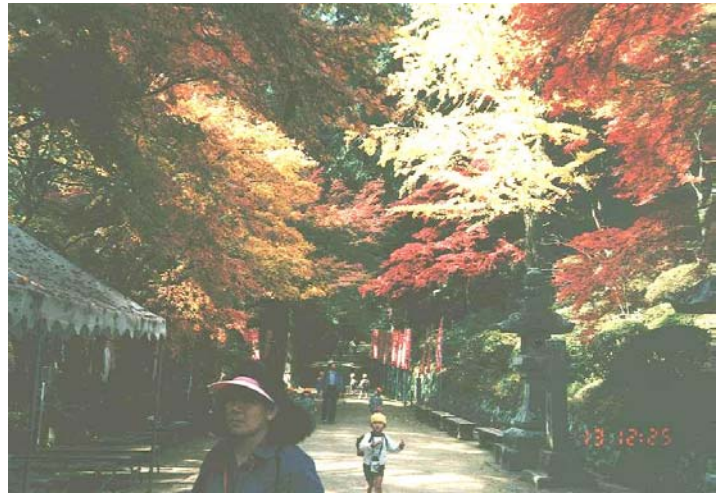
仕事といっても、若手の技術者に講義をするという気楽なもの。といっても講義は堅苦しい内容なので、雰囲気や和らげる意味もあって、先日のリブレット・コンテストに私が、「リブレットを持ってフランス旅行」という題で応募し、入賞したいきさつをカラーOHPを使ってプレゼンテーションしたりした。

（コンテスト関係は、本CD-R版の『1997年フランスドライブ紀行』の最後に追記として紹介してあります）

出来れば、27番から22番まで回りたいのだが（1番から21番は抜けがあるが回っている）一寸難しそう。

少しでも時間を節約しようと、徳山駅で好物の「あなご飯弁当」を求め、新幹線の中で早昼飯とした。姫路着は11時頃。

ニホン・レンタカーで2日間の契約で車を借りた。



### Ⅲ. 円教寺(第二十七番)

夢前(ユメサキ)川沿いに北上し、山陽自動車道の高架の下にある駐車場に止める。そこからロープウェイで書写山(標高371m)の頂上近くまで登る。

坂道を可成り登ると、仁王門に至る。大寺のそれにしては簡素であり、額に「志よしゃ山」と書かれてあるのが面白い。

書写山・円教寺は、約1000年前、性空(ショウクウ)上人によって開かれた大きな寺で、「西の比叡山」といわれていた。三十三カ所の中では、奈良の興福寺、近江の三井寺とならぶ大寺院(境内の面積34万3千m<sup>2</sup>)である。

ここから道は下り坂になるが、紅葉の盛りであった。やがて石垣の上に舞台づくりの壮大なお堂が現れる。本尊如意輪観音をおまつりした【西国33観音第二十七番札所】の**摩尼(マニ)殿(左図)**がある。一面の紅葉を透かして見上げる摩尼殿は素晴らしい。上に登り、参拝、納経帳に宝印を頂く。**下左図**は摩尼殿からの眺め。



ここから、300mほど奥に有名な『三つの堂』がある。

**食堂(ジキドリ)**を中にして、右に**大講堂(上右図)**、左に**常行堂**、いずれも重要文化財である。正面に立つとその壮観に圧倒される。

丁度食堂で宝物展が開かれていたので、拝観する。仏像などの他に弁慶が使ったと伝えられる机が展示されていた。ここには弁慶の伝説が数多く残っているらしい。

比叡山を追い出された弁慶は、ここで10年間修行したのだが、ここでも最後には大喧嘩の末、堂塔伽藍に火をつけて焼き払ってしまったのだという。

「三つの堂」の更に奥に開山堂がある。この屋根下の3隅に屋根の重みを支えるかのように左甚五郎作の伝承のある力士像がある。宝物展の受付の坊さんの話によると、かつては4隅にあったのだが、あまりの重さに堪えかねて一人が逃げ出したのだという。

開山堂の横に、和泉式部の歌塚がある。

一条天皇の中宮であった上東門院が、性空上人の教えを乞おうと書写山を訪れたことがあった。上人はこの時上東門院を避けて居留守をつかい、会おうとしなかった。そこで、中宮に従ってきた和泉武部は、早速つぎのような一首をしたためて上人に送った。

くらきよりくらき道にぞ入りぬべき  
遥かに照らせ山の端の月

これを読んだ上人は、すっかり感じ入り、中宮を招いて、ねんごろに仏道を説いたという。

上人の返歌は、

日は入りて月まだ出でぬ黄昏に  
かかげて照らせ法の灯火

杉本苑子さんは、『式部の歌は、人間一女の負う宿命の重さがじつとりと澱んでいる感じが表れた佳い歌であるが、上人の歌は格段に落ちて、たんなる「おみちびき」にすぎない』と評している。

帰りに、見晴らし台から姫路方面を眺める。淡路島や瀬戸内海に浮かぶ島々が一望出来た。

## IV. 北条の石仏から加古川市まで

### 4. 1 北条の石仏群

次の札所は、「第26番一乗寺」であるが、その北方に「北条の石仏群」と「古法華寺の石仏」があると知り、それらを回って一乗寺に行くことにした。

円教寺の駐車場から、夢前川に沿って10km余り北上する。中国自動車道を過ぎたところで右折、自動車道沿いに十数km東進すると、北条町である。

少し町に入ったところに、石仏参拝のための小さな駐車場がある。

【羅漢寺】の境内を埋め尽くすように、数百の石仏が立っている。

「いつごろ、だれが、なんのために」作ったのか、全くの謎だと言う。ただその風貌は実に特異である。杉本さんの表現を借りると、『円空仏の持つ詩情と暗鬱……。それに似て、よりエキゾチックな鼻のとがり、目のくぼみは、東洋よりも、西欧人の顔立ちに近い。』





帰ってから図書館で、若杉慧・文、金井武徳・写真「石の心 北条の石仏」 東出版（株）、昭和55年 という本を見つけた。

以下の記述は、この本による。

ここが世間に広く知られるようになったのは、若杉さんが昭和30年代にここを古文書などを含めて詳細に調査され、紹介してからのらしい。

かつては、ひどい藪の中に羅漢の頭だけが点々と見えた状態だったが、大正の終わり頃、この地域一帯の竹、雑木、荊棘を除去し、倒壊散乱していた石仏を集め、数列に並べ、現在の状態にしたようである。

これらは通称「五百羅漢」と呼ばれているが、正しくは「羅漢」ではない。

殆どの胸か額に、梵児の種字が彫ってあるからだ。石仏が正しい。

若杉さん等の調査でも謎は解けていないのだが、時期と目的については、この本に羅漢寺住職である岸原広明さんが寄せた文が説得力が有るように思える。

『この柔らかい凝灰岩の、通称、高室石〔ここから2, 3 km南から産出〕での彫刻に、今も尚はっきりと鑿のあとが残り、浅い線刻もそのままであることから推して、慶長15年あたり〔慶長15・17年在銘の遺品数個がある〕をとるのが妥当のようだ。〔〕内は敏翁。

『これらの石仏群とともに、注目されるべきは「三界万霊碑」の存在だ。

そして、そこに刻まれている「飢餓飽満(\*)の文字に秘められた、鎮魂の悲願に思いおよび、この夥しい石仏群が、実は数多の餓死者の霊を追弔供養したものでなかったかと気づかされて、昭和47年以来、盂蘭盆にはいった一夜、千灯供養を営んでいる。』

\*: 「餓」の字は、正しくは食編に句。第二水準にも無い。

#### 4. 2 古法華寺

羅漢寺から、県道43号を南下し、播磨下里のあたりで右折、やや山に入ったところに【古法華寺】がある。といっても小さな観音堂があるだけで、誰一人いないさびしいところである。石仏は収蔵庫に安置されているらしいのだが、鍵がかかっている、拝観のために何処にアクセスして良いのか何の情報もない。

ただ収蔵庫の前に記念碑が建っている。それによるとこの【石造浮彫如来三尊像】(高さ102cm、横72cm)は、約1300年前の白鳳時代のものであり、昭和36年に重要文化財に指定され、しばらく奈良の国立博物館にあったが、地元民の要望強く、昭和46年ここに収蔵庫を建て安置することとなったとある。それは結構なことと思うが、一般の参拝者にも拝観出来るようにしてもらいたいものである。

そばに石像の制作場らしい建物があったが、人影もなく、作業場の中に制作途中の石像が数体立てかけてあるのみだった。そばに磨崖仏があったが、これは全く新しいものらしい。諦めてこのへんで立ち去ることにした。

#### 4. 3 一乗寺(第二十六番)



43号に戻り、少し南下すると、一乗寺の標識が表れる。しばらく細い道を走ると、大きな駐車場に至る。【第二十六番札所・法華山一乗寺】である。

ここは、不思議な開基伝説をもっている。インドの靈鷲山(リョウジユセン)の仙人、法道仙人が、ある日紫雲に乗り、中国、百済を経て、日本に入り、この山を選んで留まることにした。仙人は大化5年(649)孝徳天皇の病を加持祈禱により治したことから天皇の帰依厚く、翌白雉元年(650)仙人がこの地に一字を創建、天皇は行幸されて法華山一乗寺の山寺号を賜わったという。

仙人はさらに数十年山にいたが、ある日、これより、本国の仙苑に帰るといって、大光明を放ち、

雲に入って飛び去ったというのである。

栗田さんによると、

『法道仙人とは何だろう。役行者に似ているが、どこかに、中国か半島の道教・仙術の道者を感じさせる。やはり瀬戸内沿岸ゆえに海外交流の下地が生きているのだろうか。前述の古法華の三尊像は、白鳳時代、渡来人仏師によって彫られたものといわれ、法道仙人の伝説と相呼応して、その開基に渡来人の姿が見えてくるのである。』とある。(前述の文との関係で文章の一部を変えてある)

4時を過ぎるともうあたりは薄暗い。受付のおばさんが紅葉の落ち葉を掃除していた。紅葉の盛りは2、3日前で、もうどんどん散って掃除が大変だとのこと。

それでもこの有名な三重塔(国宝、1171年建立)(上図)と紅葉の取り合わせは、まだ見事なまでに美しい。参拝者は私ひとりである。

三重塔の脇の急な石段を登って本堂に至る。ここから見下ろす三重塔も良い。

本堂の内部は、古い絵馬などで埋め尽くされていたが、もう暗くてディテイルは全く解らない。納経所の坊さんは、退屈なのだろう。あくびをしていた。

この寺には、国宝の絹本着色聖徳太子及び天台高僧像10幅があるのだが、それらは奈良・東京国立博物館・大阪市立美術館に出陳中でここでは見られない。

今私はそれらを、「日本古寺美術全集・19巻・山陰・山陽の古寺」集英社、昭和58年で見ているのだが、良く色彩が残っている見事なものである。

駐車場の管理人に、これから宿を探すのだが、どこが良いかと尋ねる。ここから近い町は、高砂市と加古川市だが、加古川の方が良いホテルがあるとの事でそちらに向かうことにした。

もうあたりは暗い。暗くなってから道を探すのは不得手で、又道を聞き聞き加古川駅前に到着。駅の案内所で駅前のホテルを紹介され行ってみるが満員。

今日何か大きなビジネス・ミーティングがあるらしく、そこで教えて貰ったホテルに電話を掛けてみたが総て満員だった。次に日本式旅館の電話番号を教えて貰ったが、ここは空いていた。ここも駅前にあり、歩いて5分ほどの所にあるのだが、道は一方交通が多く、到着に30分以上も悪戦苦闘した。

やっと到着した中村屋旅館は、割烹、旅館と看板が出ているのだが、もう割烹はやっていないとのこと。客も私のほかに一組だけらしい。

夕食に駅前の繁華街に出かけるが、駅前からまっすぐに伸びる商店街はまあまあだが、それに直交するアーケード街は、まだ6時だというのに皆ブラインドを閉めてしまっていて、通る人影も殆ど見かけられない。

今、地方の町はみんなこんな感じなのだろうか？

とある焼鳥屋で夕食をとった。

以上 11月13日終わり



## V. 鶴林寺、浄土寺、朝光寺

掲題の3寺は、33観音札所には含まれていないが、いずれも「国宝」の建造物などを持っていることで名高い寺である。

これらを参拝しながら、25番札所清水寺に向かうことにした。



### 5. 1 鶴林寺

【鶴林寺】は、加古川市内にあり、宿から車で5分程度。

かつては、海浜に近かったそうだが、今は埋め立てが進んで、潮風の匂いはない。しかし、境内は砂地に成っていて明るい。その広い境内に国宝、重文の伽藍が立ち並んでいる。

寺伝によると、高麗の僧恵便法師が物部守屋の迫害を逃れこの地に隠棲した時、聖徳太子がこの地に来て法師に教えを受け、秦河勝に命じて一宇を建立、刀田山四天王寺聖霊院と称したのが始まりという。その後鳥羽天皇が勅願寺として「鶴林寺」の扁額を賜い、現寺号に改めた。

山門を入れて正面に南面するのが**本堂（国宝）（上右図）**で、室町時代の応永4年（1397）の再建。唐様・和様・天竺様の様式が混じるいわゆる折衷様式であるが、各様式が見事に調和して楷調の美をみせていて、折衷様式の代表的な遺構として貴重なものである。

本堂の前左側にあるのが太子堂（国宝）。遺構中もっとも古い建物で、平安時代の天永3年（1112）の建立。大きなお堂ではないが、軒の出が深く、陰影に富んで落ちついた優雅な雰囲気なたたえている。

この他、各々「重文」の鐘楼、護摩堂、常行堂、行者堂がある。

「県重文」の朱塗りも鮮やかな**三重塔（上左図）**も美しい。

宝物館を拝観する。収蔵品の殆どは「重文」である。絵では、絹本聖徳太子絵伝8幅、同聖徳太子像が見物。

また銅造聖観音立像は、像高83cm「**あいたた観昔（左図）**」の名で知られる白鳳仏の傑作である。流れるようにひねった細い身体に、微笑をたたえたこの像は、たびたび海外にも渡っていて内外に名高い。

名前の由来は、その昔、盗人がこの観音像を盗み出し、溶かして一儲けをたくらんだが、「アイタタ」という観音さまのお声に驚き、像を返し改心したという伝説による。



これより、「浄土寺」に向かう。朝から雨空だったが、降り出してきた。

加古川の東岸上を走る県道を廻り、小野市で国道175号線に入り北上、「浄土寺」の標識に随い右折、少し進むと大きな駐車場に到着する。

## 5. 2 浄土寺・阿弥陀三尊(国宝)

【極楽山浄土寺】である。雨は止んだが雨雲が低く立ちこめている。

ここは鎌倉時代の初期、源平の戦禍により焼失した奈良東大寺再建の命を受け大勧進職となった俊乗房重源上人が、領所の播磨大部庄に東大寺再建の拠点として建久年間（1190年代）に開創した古刹である。

石段を一寸登ったところが境内で、すぐ浄土堂（国宝）（上左図）がある。

このお堂は建久5年上棟、方3間・宝形造り・本瓦葺きの堂々とした建物で、東大寺南大門とともに純粋な天竺様建築の数少ない遺構としてきわめて貴重なものであるそうだが、外部は白く塗った板壁と赤い扉がいかにも安物の

感じであり有り難みは感じられない。

この中に、国宝阿弥陀三尊（左図）があるの

だが、扉は閉まっており、又境内に誰もいない。石段の下の寺に案内所があると書いた札が貼ってある。降りていって寺の外の道を掃除していたおばさんに尋ねると、「一寸待ってほしい。今鍵を持っていくから」とのこと。おばさんが受付もやっているのだ。

やがて鍵を持って表れたおばさんは「こんな雨空で誰も来ないと思った」という。実はここの阿弥陀三尊は、明るい光の中、特に夕日を後ろから浴びたお姿が最高とされているのだ。

それにしても、内部の円形の須弥壇に立つ阿弥陀三尊像の阿弥陀如来は高さ5.15m、脇侍の観音・勢至の両菩薩像は3.7m。天井に届くほどの巨像で、その巨大さと、重量感は堂内を圧倒している。安阿弥陀仏快慶の作と考えられている。

しばらく栗田さんの本の描写を借りよう。

『折しも、ちょうど午後半ばをすぎた夕陽が、三尊の背後の透部を通してさしこんでくる。

堂内の薄明りに目になれると、なんという広さだ。目線は天井板のない、はるか頂上へと組み柱の間を限りなく



天空へと伸びてゆくかに思われる。堂内を見廻しても、壁はない。ゆったりと立つ太い四本柱の向こうには、幽かな空間がひろがっている。(中略)

よく見ると、三尊は、それぞれ雲座の上に乗っているが、それがさらに円型の仏壇の上に乗せられていて、それを囲う何物もない。

ふつうなら四本柱で囲われた円筒仏壇で固定され、後ろには必ず仏後壁があって、礼拝の対象としての安定感がある。

ところが、この円型の仏壇は四本柱と無関係で、三尊の後ろは何もない。明け放たれ、そして、その後ろから、ただ、しきみ戸を通して夕陽の光がさしこむばかりである。つまり、この三尊は、天井身屋<マ>も庇もない御堂の中央に、ただ頂高い天頂へ向かって立っている。周りをめぐって拝すると、三尊はむしろ前かがみに傾斜している。

あたかも衆生済度に先へすすむのを急ぐかのようなようである。私は、このような切迫感のある阿弥陀像を思い出した。

たとえば高野山のあの「阿弥陀二十五菩薩来迎図」、知恩院や興福院の「来迎図」、禅林寺の「来迎図」など、平安末から鎌倉へと、来世の不安が深まるとともに、弥陀三尊の来迎も、一刻も早く臨終の衆生に手をさし伸べてくれるよう、人々の願いが、風によって早駆ける来迎への期待となっていったのだ。

この三尊像はまさに早来迎のお姿ではないか。重源はそれを意図していた。』

この記述の様な光に包まれたお姿を拝めないのは残念だ。見ると夕日の中に幻想的に浮かび上がった三尊像の大判の写真を買っていたので求めることにした。(他の三枚と併せて千円) この浄土堂に向かい合って東側に薬師堂(重文)がある。方5間の実に立派なお堂である。

同じ境内だが、この二つのお堂を結ぶ線のやや北に八幡神社がある。珍しいのは拝殿が割拝殿(横長床張りの中央に土間を通した形式)であることで、割拝殿としては県下ではもっとも古い作例であるそうだ。拝殿、本殿(これは普通のお姿)いずれも重文に指定されている。(前頁上右図)

第一報 終わり

敏翁

## 西国ドライブ巡拝記(その3) 第二報 敏翁

### 5. 3 朝光寺

ここから「朝光寺」に向かう。駐車場に地元の自動車教習所の路上演習の車が留まっていた。その先生に行き方のコツを教わった。国道175号線から県道17号線への入り方がややこしいのである。17号線を7kmほど東進したところで「朝光寺」の標識を左折、かなり山の中に入っていく。又雨が激しくなってきた。

駐車場から細い道が林の中に入っていく。やがて小さな瀧(つくばねの瀧)が正面やや右に現れ、瀧の一寸手前左の石段を登ったところが、【朝光寺】の境内である。人影は全くない。

ここも白雉2年(651)法道仙人の開創と伝える古刹である。創建当時は背後の山上にあったが、文治5年(1189)現在地に移った。江戸時代は姫路城主池田輝政が深く崇敬して寺運も隆盛し、坊舎も50余を数えたという。

現在塔頭は吉祥院・総持寺を残すのみで、わずかに国宝指定の本堂と、重要文化財指定の鐘楼が盛時の面影を伝えている。

本堂は、応永20年(1413)の創建、桁行7間・梁間7間・一重寄棟造り、向拝3間・本瓦葺きの堂々とした建物である。和様を基調とした折衷様式で、鶴林寺とともに折衷様式の終を飾るものとして国宝に指定されている。

本堂の中に入る。張り紙の類が全く見られず、あまりの清潔さにかえって異常の感じさえした。

また栗田さんの描写を借りよう。

『内部も内陣外陣に分れ、とくに外陣の庇の境に建てられた太く高い列柱は、見る者の胸を踊らせる。内部の配置には密教様式が、また四間の大形厨子には禅宗様式の影響があるといわれるが、そのような折衷の変化が、端正なたたずまいのうちに、室町のバロック調のおもしろい華麗な変他で見る者を遊ばせてくれる。ちょうど、円教寺の常行堂のおもしろさと同じである。』

栗田さんは、時々「バロック」という表現を用いるのだが、スペインの強烈な表現を持つバロックを見てきた私

には、あまりしっくりこない。

日本でバロック化が起こっても、その風土に似て穏やかで慎ましやかなものとならざるを得ないのだろうか。

## VI. 清水寺(第二十五番)、花山院(番外)

ここから「25番札所清水寺」へ向かう。雨は止んだようだ。

東条湖の西岸を北上し、311号線に入り少し行くと、清水寺専用の取り付け有料道路入り口に至る。この道で山を登って行くのだが、舗装の状態も良く走りよい。3kmほど走ってかなり広い駐車場に到着する。

【第25番札所・御嶽(ミタケ)山清水(キヨミズ)寺】である。

この寺も、法道仙人の開山による。由来此の地は水に乏しかったが、仙人が水神に祈って霊泉湧出したことからつけられた。

降って、坂上田村麻呂のあつい帰依をうけた。

ここから杉本さんの記述を借りる。〔〕内は敏翁。

『田村麻呂は本拠を中国街道すじの犬飼、矢代へん〔清水寺の北東約十数km、丹南町・篠山町の一部〕に置いていた帰化人の部族で、朝廷から奥州征伐を命ぜられた際も、ここ、清水寺の観世音に必勝を祈願し、三ふりの太刀を奉納して出陣した。(中略)

ところが、やがてエゾを討って凱旋した彼は、邸を賜り、武官として京都に駐在することになる。このためふるさと清水寺の観世音を洛中に勧請し、地形のよく似た東山にお堂をたててお祀りしたというのが、音羽山清水寺〔清水の舞台で有名な第16番札所〕の始まりなのである。』

しかし、ここの堂宇のほとんどは、明治から大正初年にかけての火災で焼失してしまった。そのため今の建物は、皆新しく、色も朱、金色鮮やかで、他の札所とは雰囲気全く異なる。本坊は、ユースホテルになっているほどである。又ある地図帳などでは、『清水寺(新清水)』と表記してあった。

大講堂(大正6年再建)で納経帳に宝印を頂いた後、内陣に入って間近から本尊・十一面千手観世音菩薩を拝む。新しいもので金色に燦然と輝いてした。

ここから「花山院」へ向かう。

取り付け道路を戻り、311号線を東進、141号線を南下、福知山線「相野」駅のそばで左折309号線に入り、すぐ踏切を渡って暫く東進する。

青野ダムを渡り、さらに進むと「花山院」の標識が現れる。ここを右折10号線を少し行くと、花山院への取り付け道路がある。これは、清水寺とは大違い。

山の中の寺への取り付け道としては珍しいものではないとは云え、相当な凸凹道である。かなり登ったところに駐車場がある。

杉本さんの時(昭和40年頃)は、タクシーを利用したのだが、エンジンの消耗をおそれる運転手にうまく誤魔化されて、取り付け道の手前で降ろされ、残暑の中をあえぎあえぎ登ったとある。当時はもっと酷い道だったのだろうが、車の性能も今からは考えられないほど低かった為もあったのだと思う。

石段を登ったところが境内である。ここからの眺めは素晴らしい。近くの秀峰有馬富士は、標高はここより低い(374m)のだが、低く垂れ込めた雨雲の中に、ぽっかりと浮かんで見える。

【番外 東光山花山院菩提寺】である。

ここは、西国三十三所中興の祖である花山法皇終焉(御年41歳)の地である。花山法皇については、私の「巡拝記」でも(その1)の番外 元慶寺のところで剃髪の経緯、(その2)の第一番 青岸渡寺のところで、その後の三十三所との関わり合いについて触れている。

本堂は、小さなお堂である。その前に、大きな紅葉の木があり、その紅が見事だった。寺務所で宝印を頂き、併せて取り付け道路の管理費500円を収める。

ここから、10号線を降るのだが、有馬富士の手前に尼寺(ニジ)という部落がある。ここには哀れな伝説が語り伝えられている。

以下は杉本さんによる。

『ある月の澄んだ夜、勤行している法皇の耳に、かつて宮廷で聞いたとおなじ琴のしらべが、松籟にまじってながれてきた。いぶかしく思って花山院を出、参道をふもと近くまでくだってくると、そこに見なれない草庵がむすばれ、むかし近侍していた女房十一人が、尼すがたで住んでいるのに遇った。琴をひいていたのは、うちの一人だ

ったのである。

彼女たちは法皇をしたって都をぬけ出てきたのだが、女人禁制の建札におそれて山麓に住みつき、尼となったもので、尼寺村のはずれには、古い樺の木の下に、その墓と称する小さな十一基の五輪塔が、いまなお苔むしたまま残っているのである。』

## Ⅶ. 中山寺(第二十四番)

掲題の寺社のある「宝塚」へ向かう。

10号線、37号線と乗り継いで、国道176号線に入れば、かなり距離はあるが、そのまま宝塚に至る。

宝塚歌劇場前の大きな信号で、176号線の本道は、細くなり、町中に入っていく。(バイパスがある)

先に「清荒神」が有るはずだが、入り口が解らず、「中山寺」のそばまで行ってしまった。案内書によると、寺のそばには車を留められないとあるので、適当な私設の駐車場に留める。そこの管理人に清荒神への行き方を尋ねる。

歌劇場前の交差点を北上すれば簡単に行けるらしい。

歩いて5分ほどで【第二十四番札所 紫雲山中山寺】に至る。



寺伝によると、この地は仲哀天皇の妃大仲姫とその子忍熊王を葬った地で、のち聖徳太子がその追善のため当寺を創建したという。当時西は武庫山、東は猪名野川にいたる広大な寺域をしめ、隆盛をきわめたという。

その後盛衰があったが、豊臣秀頼が再建した。

それは豊臣秀吉が、当山に祈誓し、淀君の腹に秀頼をもうけた事への報恩の為で淀君の意向によるものだろう。又孝明天皇の妃中山一位の局も懐妊中、当寺の腹帯をうけて明治天皇を安産したと伝えられている。

寺は、本邦随一の安産祈願の寺だとしている。

ここはにぎやかな寺である。安産、子育てを標榜しているので、何時も若い夫婦が子供を抱いて参拝する姿が多いのだそうだが、今日は七五三の季節でもあり、雨も上がって、着飾った子供たちも混じって特別にはなやいで見える。

驚いたのは、境内に入るには20段(?)程の石段があるのだが、その横に天井付きのエスカレータが設置されているのである。そこからの参道の左右に五つの塔頭があるのだが、いずれも子供の育成に関わっているようで(虫封じ専門の塔頭もあった)、皆大いに繁盛しているようだ。

ここから一段と高いところ(石段40段?)に本堂があるのだが、ここにも天井付きエスカレータが付いている。私の経験では、こんなお寺は初めてだ。

本堂の前では、白装束の巡礼の大集団が一心に般若心経を唱えていた。

これも今回の旅では、初めてお目にかかった。

寺務所で宝印を頂き、そばにある「羅漢堂」で「五百羅漢」を見る。

「親兄弟の 顔がみたくば 中山寺の 五百らかんの 堂にござる」と詠われているそうだ。

## VIII. 清荒神 (キヨスコウジン)



176号線を戻り、教わった道順で「清荒神」に向かう。

歌劇場前を右折、新しい太い道を進み、中国自動車道の下を潜るとすぐ、標識に随って右折すれば、簡単に相当広い駐車場に到着する。

**【清荒神 (キヨスコウジン) 又は蓬萊山清澄寺】**である。**(上左図)**

私がここを訪れる目的は、ここに設置されている「鉄斎美術館」を参観する為だが、ついでに荒神堂と本尊にもお参りすることにした。

ここは平安時代の寛平5年(893)宇多天皇の勅願によって創建されたと伝える古刹。当時は七堂伽藍を備え、支院72を有し寺運も大いに栄え、西の高野とまでいわれたが、寿永4年(1185)源平の合戦で焼失、建久元年(1190)源頼朝が再建した。しかし天正年間(1573~92)ふたたび兵火で焼失、その後長い間再建されなかったが、幕末期にようやく、現在地に再興した。

境内に清荒神を祀る荒神堂がある。宇多天皇から「日本第一清荒神」の尊号を受けたといわれ、火の神・かまどの神・水商売の神として信仰者が多く、毎月27・28日の荒神縁日は数万人の参詣人でにぎわい、とくに年始めの初荒神祭、年末の納荒神祭は数10万人の参詣客でにぎわうという。

それで、広い駐車場の意味が解る。

参道の両側に、屋台が並んでいるが、今日は殆ど全部閉店でビニールで包まれ雨に濡れたた屋台群は、見窄らしく見苦しい。

荒神堂の横に、**錫杖を奉納する堂**があった。実用には大きすぎる錫杖や、数え切れないほどの錫杖頭部の鑲が奉納されている有様は異様で且つ迫力がある。**(上右図)**

## 8. 1 鉄斎美術館

本堂にお参りした後、その後ろにある【鉄斎美術館】を訪ねる。

富岡鉄斎は私の好きな画家の一人である。

彼は、天保7年（1837）京都に生まれ、大正13年（1924）に死去した画家であったが、彼自身は自分が在野の儒学者であり、「士」であって、余技として書画を制作するのであるとし、画家と呼ばれることを拒絶し続けた。

当清澄寺の先先の法主坂本光浄は熱烈な鉄斎ファンで、鉄斎の書画を数多く集め、晩年の鉄斎と親交を結んだ。当山に収蔵されている作品は千点にも及ぶという。

法主は、鉄斎展を国内は勿論、フランスや米国など海外でも開くのに注力し、鉄斎が内外に知られるようにした功績は大きい。

美術館では、テーマを決めて展示しているのだが、今回は、掛け軸の人物画を中心に四十点ほど展示してあった。

鉄斎の画は、その賛（全部漢文）が読めないと十分に鑑賞することが出来ない。しかし鉄斎の賛は、読みにくく専門家でも間違える事があるのだという。

まして私などの素養では、到底及ぶところではない。

幸い、展示には賛の読み下し文と解説がついていて鑑賞に便利になっている。

賛の中には、あまりにも教訓臭が強すぎて私なども好きになれないものもあるが、画と賛がうまくマッチしたものは、独特の味わいがあり素晴らしい。

帰ってから、「現代日本美術全集 1 富岡鉄斎」集英社 1977

を図書館から借りてきて、記憶と照らし合わせると、2, 3具体的に思い出したので、その作品解説を借りて雰囲気を紹介する。

このところ記憶力も大分怪しくなってきたので思い違いが有るかもしれないが。





### 古仏龕図(前頁上左図)

1918年(大正7) 紙本着色 一幅

133.4 x 45.7 cm

古仏とは悟りを開いた者に対する尊称、龕は「ずし」である。岩窟中に布袋、維摩、達磨、観音、魚藍観音、阿弥陀如来が同居している図である。

この図には「求仏求仙全妄想」「無憂無慮即修行」という対聯が付いている。

この句は元の石屋清供禅師の山居詩からとったものである。

詩の大意は次のとおりである。

『われわれは本来不生不滅の仏心をもっているものであって、それを惜しや、欲しや、憎や、可愛やという妄念に変えさえしなければ、そのまま仏なので、そのうえさらに修行して仏になろうとしたり、仙人になろうとするのは、全く妄想である。生まれつきの仏心のままでいて、憂いや、おもんばかりを起さぬことこそが、修行というものである。』

### 普陀落山観世音菩薩像図(前頁上右図)

1924年(大正13) 紙本淡彩 一幅

91.0 x 33.1 cm

普陀落山は寧波府定海県の東の海上にある島で観音の霊場として有名。鉄斎は若い時から白衣を着た観音の像を、非常に多く画いたが、これは最晩年の作。

賛は『東坡七集』一東坡続集巻十に載っている蘇東坡の応夢観音賛。大意は次のとおりである。

『観音を礼拝し奉る。その観音は美しい石の上に、ゆったり坐っている。観音は、うとうとと夢見心地の中に、わが空寂の心に応じて姿を現わし給うたのである。しかし本分から言えば観音は不来不去、われのところに来られたのでもなく、われもまた不来不去、観音のみもとに行つたのでもない。月は天上にあり、水はたらいのなかにあつて、それぞれ不来不去。しかも、不来不去でありながら、たらいの水に月影が映るように、わが空寂なる心のなか、観音の姿が映つたのである。』

鉄斎は、誕生日が同じなことから蘇東坡を愛し、蘇東坡の画も多く描いていて、今回の展示の中にも含まれていた。

### 弘法大師在唐遊歴図(左図)

1924年(大正13) 紙本淡彩 一幅

134.0 x 33.5 cm

清澄寺法主坂本光浄に贈った作品。同寺が真言宗なので、宗祖弘法大師空海が入唐求法した時のありさまを、筆のかわりに墨の棒をじかに使う珍しい技法で画いてある。賛は唐人胡伯崇が大師に贈った歌を、大師の詩文集『性霊集』の序文のなかから引用してある。

「四句を説き、毘尼を演ぶ。凡夫の聴者尽く帰依依す。天、我が師に仮すに伎術多し。就中、草聖最も狂逸。」

尚、四句は仏法の大意を述べた四句の偈。毘尼は戒律。草聖は草書。狂逸はすぐれていることである。

以上鉄斎の画の雰囲気的一端を表現したつもりだが、読む皆さんに

旨く伝わるかどうかは全く自信がない。

いずれにしても、私にとって西国巡拝の旅の終わりに見るにふさわしい美術館であり、展示内容であった。

## Ⅸ. 旅の終わり

清荒神を離れたのが、午後4時を回っていた。納経所の締め切りが5時なので、次の23番札所勝尾寺はあきらめ、新大阪に向かうことにした。

道路の渋滞が始まっていて、一寸道を間違えた事もあったが新大阪に着いたのは6時を回っていた。

金曜の夜の登り列車は混む。指定席は大分後まで満席。新大阪発、新横浜停車の列車を選び自由席を30分ほど並んで確保。

自由席は乗車率120%以上だった。

新横浜からは、いつものようにタクシーで帰宅。タクシーの運転手が旅好き、話好きでおしゃべりをしている内に自宅に到着した。

完

敏 翁